
亀甲天神

翠條サツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亀甲天神

【Nコード】

N8976P

【作者名】

翠條サツキ

【あらすじ】

とある神社の神様が主役の短編シリーズ。
願いを叶えない、長期間神社を留守にする、訪問先で塩をまかれるなど自由気ままな行動を取る神様に振り回される従者達や振り回し返す(?)巫女を描いた全12作＋αの予定。

祭事・行事や季節柄などネタはオールジャンル。思いついた順に書いているので作中の時間（巫女の年齢）はバラバラです。

月日がはつきりしているものはサブタイトルの後ろに（ ）で補記

しています。その時に読んでも良いし、気にせず読んでも全然問題ありません。

雨乞い（1月3日深夜）

風が社を囲む木々を揺らし、ようやく訪れた静寂を彼方へと吹き飛ばす。ざわめきは潮騒のように遠く近く、強く弱くと一定しない。けれど、それは聞くものに不快な感情を抱かせるものではなく、むしろ心地よい大合唱となって周囲に響き渡る。ここ数日、朝も夜も関係なく人が押し寄せて来ていたことで疲れきっていた彼らにとっては、一服の清涼剤のようであった。

が、癒しの音楽もまったく効き目のない存在もいた。

「いい加減、もう帰っても良いだろう。約束通り、年末から正月三が日いたんだ。役目は果たしたぞ」

社の最奥、御神体を祭った祭壇を背に胡座をかいて座る青年が、目の前にずらりと並ぶ者達に大声で主張していた。すでに青年の中では『役目終了』が決まっているのか、服装も着物から洋服に変わっている。

「そうはおっしゃられても、巫女殿からの情報によりますと今年の冬休みは大半が8日まで。参拝者はまだまだ来ると思われます。なのに肝心の命様が不在では、せっかく足を運んだ彼らの苦労が水の泡になってしまいます」

「水の泡もなにも、いてもいなくても同じなんだから、いつ来たって無駄足なんだよ」

あまりな内容にそこかしこでため息をもらす者や頭を押さえる者が続出する。いくらソレが真実でも『命』の名を持つ者が、ここまできっぱりはつきりと言っていないセリフではない。

「いくらなんでも、そこまでハッキリ言うのはどうかと思いますが」
「曖昧に言っても意味は同じだ」

至極もつともなのだが、全てが直球では世の中は回っていかない。

「……とりあえず、残っている本日分の願いを片付けて下さい。命様以外、出来ないことなんですから」

役目に関しての議論は後回しにする。続けても平行線を辿るだけなのは、今までの経験からよく分かっている。

「えー、まだあるのかよ」

「この数日で何十万人来たと思ってるんです。何でしたら今年の参拝者数、下一桁まで申し上げますが？」

ひとりひとりの願い事を記録しているのだから人数どころか性別、年齢まで完璧に把握している。

「いいよ、吐き気しそうだから。仕事すればいいんだろ。するから、ちやっちゃんと進めてくれ。あ、同じ願いごとはまとめるように。無駄は省けよ」

青年の言葉にひとりが扉の向こうに声をかける。すると即座にくつもの箱が室内に運び込まれた。
飽きっぽい主に仕える彼らの用意は周到で、行動は迅速だった。

* *

遙か昔から青年の仕事の手順は徹底している。特に願いごとは仕事の大半を占めるため、スリム化がもっとも進んだ部門だったりする。

居並ぶ者達がそれぞれの前に置いていた箱を開けて行く。箱は紐で封印されており、その色別に願いごとの種類が分けられていた。

「では、一番多いものから」

青い紐が脇に置かれた箱から真っ青な一枚の紙が取り出され、前列に座る者にそれが手渡される。

「試験に合格できますように」

「効率のいい勉強方法を見つけた。次っ」

黄色い紙がまわされる。

「健康でいられますように」

「自己管理を怠らず、マメに検査を受けておけば大抵なんとかなる。後は運だな。俺達の関わる事じゃない。次っ」

赤い紙が手元に届く。

「好きな人が自分を好いてくれますように」

「心なにご不安定なものなんだから、努力すりゃなんとかなる。次っ」

緑の紙が差し出される。

「勝負に勝てますように」

「体力勝負なら鍛えて相手の弱点を探ればいい。知力なら攻略方法
つを吟味して、相手にないものを出せばいい。次っ」

紫の紙が置かれる。

「あの人と会えますように」

「他力本願もいいところだな。色々手段はあるんだから自分で見
つけ出して、会いに行け。次っ」

白い紙が運ばれる。

「幸せになれますように」

「だから、自分でなんとかすることだろ、それは。努力しろ。そし
て掴んだら離すな。次っ」

黒い紙が一番上に重ねられる。

「あいつが死にますように」

「そんなこと頼むな。止めないから自分でやれ。……これで終わり
か？」

「はい。ですが毎年これでは問題があります」

結局青年は何一つ願いごとを叶えない。

こちらは三が日だけで50万人以上の信仰心を貰っているというのに。

「毎年同じような事しか願わない方が悪い」

「人の願いなど、いつも同じものです」

像も社もなかった頃から、人が願うことは『幸せになりたい、幸せになってほしい、不幸になってしまえ』この3つに大きく分けられる。彼らの中に願う対象が存在する限り、変わることはないだろう。

「彼らがどう思おうが勝手だがな。神社は願いを叶える場所じゃない、意気込みを報告しに来る場所だ。少なくとも俺はそう思っている」

「そうですけど……」

全ての願いを叶えることは無理だ。

そんなことはもちろん分かっているが、どこにも届くことなく消えて行く想いが悲しかった。

願いの行く末を愁い、うつむいてしまった従者に青年が苦笑する。

「ほんと真面目だな、お前は。……分かったよ、今年は8日まで本殿にいる」

思いがけない青年の発言に全員が身を乗り出す。

「でも、だ!」

喜色満面の彼らに青年はある条件を突きつけた。

「願いごとを全部持ち込むな。俺が気にするものか無視するかの区別くらいつくだろ。そっちで分類してから、俺のところに持って来るように。切り捨てと思うな。大概の願いごとは本人がどうにか出来るものばかりなんだからな」

「はい、分かりました」

全員の声が綺麗に重なる。

「じゃあ、今日はこれで解散っ」

そう言うと、青年はさっさと社を出た。

＊ ＊

後ろを振り返ることなく、そのまま神殿まで歩き、松の古木の前で青年は立ち止まった。そして木々の間にわずかにのぞく夜空を見上げる。月が見えない代わりに有名な冬の星座の一部が目に入る。

しばらく彼方の輝きを眺めた後、青年は盛大なため息をもらした。

「明日も晴れか」

期待した雨雲の気配は見渡した空のどこにも見つからなかった。これで明日も参拝客が押し寄せるのは確実だ。

「雪でも降れば良いのに」

そうすれば最寄り駅の電車の本数も、そこからのバスの便数も極端に少ない――正月三日は一日9本の無料シャトルバスが運行されていた――ここを訪れる人数は激減する。けれど関東に位置するここは2月にならないと滅多に初雪が降ることはなく、その願いが叶えられることはまずなかった。

「天神にでも願いごとしに行つてやろうか」

年末からずっと本殿に拘束されてる上、なし崩しに今年も滞在期間を延長することになってしまった青年は半ば本気で呟いた。

雨乞い（1月3日深夜）（後書き）

旧サイト 2001. 1. 4UP分を加筆修正

確かシリーズで一番最初に書いた話。

※昔のアップの年を間違えていたので修正しました。

レトロ

駐車場の隅に自転車を置き、まだ開店していない土産物屋の間を抜けて朱塗りの大鳥居をくぐる。

緩やかに左にカーブする参道を小走りに駆け抜けていた少女は、総門への階段の手前でその足を止めた。

振り返った少女の視界に降り注ぐ日の光を乱反射している参道が飛び込んでくる。それはまるで水面のようで、思わず目を細めた。

＊ ＊

玉砂利が敷かれた参道は歩きづらい。

足下が安定しないため力が入れにくいのは砂浜と同じだったが、コロコロした石は靴の中に入るとんでもなく痛いし、靴はすぐ傷だらけになる。足音はどんな時でも賑やかだし、石に突っかかって転びそうになる。

神社は子供からお年寄りまで訪れる場所であるのに、参道から本殿前までどこもかしこも足下は玉砂利。万人を受け入れる場所には不似合いな気がした。

だから尋ねたことがあった。

「どうしてコンクリートにしないの」

そう言った少女に青年は逆に問い返して来た。

「足下を見る。自分が歩いて来た場所を。何が見える？」

「何がって……」

言われるままに見下ろし、そして背後を振り返る。

「デコボコだね」

敷き詰められた小石はその上を歩いた人の分だけ乱れ、まるで水に浸食された石灰石のようだった。

「そのデコボコのひとつひとは誰かの足跡だ」

「足跡？」

「そう。参道は全ての歩みを刻み、覚えている。形を持たない玉砂利だから出来ることだ」

確かに固まっているコンクリートは受け止めはするが、受け入れ

はしない。むしろ侵入を拒む性質を持つ。

「それに玉砂利は踏むことで身を清めるという意味もある。神社は神聖な場所だから略式の禊だな」

「へえ、意味あったんだ」

ただ単に昔からのスタイルをそのまま引き継いでいるだけだと少女は思っていた。

「なくて全国の神社仏閣が一樣に参道に玉砂利を敷くわけがないだろう」

呆れたように言った後、青年は付け足した。

「参拝者全員が手水舎で清めをやるとは限らないから、玉砂利を歩くことで強制的に禊をするという意味もあるけどな」

「それって……」

知らないところで勝手にやるのは問題ではないだろうか。

表情の変化から少女の考えを読み取った青年がふっと小さく笑う。

「仕方ないだろう。ここは神社だ、そもそも外とは『場』が違う。清めはどちらにとっても必要なものだ」

生きている限り、どうしたって穢れはつく。それはもう本当にどうしようもないことだ。

だからこそ参道が必要になるのだろう。神と対面する身は清浄でなければならぬから。

「もつとも、どんな意味があっても参道が不親切であることは確かだ。体が不自由な者には申し訳ないな」

「でも、うちは楼門近くまでなら車で来られるし、楼門からは石畳があるから多少はマシじゃないかな」

「多少は、な」

改善したくても出来ないことがある。

残したくても残せないものがある。

誰であろうと世の中、万事が上手くは回らない。

＊
＊

早朝の参道は山ほどデコボコがあっても、どこか静かで寂しい。でも、あと数時間もすれば、そこには沢山の足跡が刻まれる。

幅広の階段を小走りで駆け上がり、手水舎へ進む少女の足下で玉

砂利が音を立てる。

じやりじやりじやり。

意味のある一歩一歩を踏みしめながら、少女は柄杓に手を伸ばした。

レトロ（後書き）

旧サイト 2003. 10. 9 UP分を加筆修正

『モノカキさんに30のお題』のひとつ

伊勢旅行で「倭姫宮」の参道を歩いてる最中に浮かびました。
内宮や外宮と違い、歴史も浅く立派な巨木とかないし、林道みたいな参道だけど凄く凄く好きです。

それ禁句（1月10日）

年末年始の慌ただしさが少し収まったと思ったら、続けて成人の日を含めた連休が到来。

時期をずらした参拝客で再び大混雑となった神宮だったが、日が傾き出すと寒の入りをした後ということもあって次第に人影はまばらとなり、授与所を閉める頃には境内は普段の静けさを取り戻していた。

「やっと終わったあゝ」

拝殿に敷かれたホットカーペットの上に突っ伏すように寝転んだ巫女の乱れた裾を、同性の従者が即座に整える。いつもなら続けて「はしたないですよ」と注意するところだ。

しかし祈祷だけでなく、お札やお守りを買求める客の相手でバイトも含めてフル回転だった授与所の応援も巫女はこなしていた。昨年末から積み重なった疲れはピークに達している。言ったところで反応する元気も残っていないければ、聞く耳すらどこかに行ってしまったに違いない。

そんな相手に与えるべき言葉が諭すことではないことぐらい従者も分かっていた。

「本当にお疲れさまでした」
「ありがとう」

暖かいカーペットに横たえた身体をごろんと転がし、労いの言葉をかけてくれた相手に向き直った巫女の口元がほころぶ。

「でも来週には月次祭と献詠祭披講式が控えてるんだよね」
「……その後には星鎮祭と新年射会がありますね」

笑顔から一転、視線を力なく下げて呟いた巫女に、従者も彼方を見やりながら続ける。

「献詠祭披講式」では神へ昔から伝わる独特の節で歌いながら短歌を献上し、「星鎮祭」では神代の昔、世の中を乱す星の神「天香香背男」を祭神が弓で射落とし星塚に鎮めたとの神話から、御殿での神事に続き弓道場で射礼などを行う。

神宮で行われる数々の祭典の中では中祭以下のものだったが、どちらとも一般客の参拝が可能なため巫女にとっては気苦労の多い行事のひとつであった。

「めんどくせーよなあ」
「!？」 命様、それは禁句ですっ」

背中をびくりと震わせ、口元に人差し指を当てながら振り返った従者の若干青ざめた表情に、命様と呼ばれた青年は遅まきながら自分の失言を悟った。

慌てて自分の口を両手で押さえるが、もちろんそのぐらいでこぼれ落ちた言葉がなかったことにはならない。

その姿勢のまま数秒固まった後、従者の影になった巫女にそろりと目をやるが聞こえていなかったのか寝転がったまま変わった様子はない。それに青年はほっと肩をなで下ろす。

この時期、自分達も人の気に当てられて疲れるが、実際に相手をしている巫女達の疲労度も半端ではない。そんな時にいつもの調子で愚痴をこぼしてはいけない。

――危なかった

――地雷原にスキップで飛び込むご趣味でもあるのですか？

――地雷原は分かるけど、スキップって

――考えなしという点では同じレベルに思えますが

――不発だったようだがな。さすが俺

――……それはどうでしょうね

「……命様が張り切るから」

ぱくぱくと無音声会話をする2人の間に、暗雲立ちこめるといふ雰囲気を持った巫女の低い声が割り込んだ。

「え、俺のせいかな？」

ほらねと言わんばかりにふっと口元をゆがめた従者にキツイ視線をくれてから、青年が巫女に返す。

「だって、うちしかしてない」

恨めしそうな目を向けて来る巫女に、青年は明後日の方を向きながら頬をかいた。

周囲に推されて、やむなく蘆原中津国平定に天降りしたのであって、その際に星神を鎮めたのは成り行きだ。自ら望んで行ったわけでもないことを責められても正直困る。

しかしその結果が星鎮祭であり、うちだけでしか行っていないとなれば、巫女も理不尽な八つ当たりのひとつもしたくなるというもので。

「……奴に押し付けときゃ良かった」

共に天降りした相手の鎮座する神宮がある北東を見やりながら呟くが、今さら遅い。

過ぎたことを考えるより、カーペットの電源を落としに来たはずなのにゴロゴロ転がる巫女の気力を回復させ、立ち上がることに尽力を注ぐ方が青年にとっても従者にとっても遥かに大事だった。

それ禁句（1月10日）（後書き）

旧サイト 2006. 1. 10UP分を加筆修正

『セリフ100』様の「ショートバージョン2」のひとつ

拝殿にホットカーペットが敷いてあるのは本当です。
実体験。

不適切な表現は控えて下さい（1月中旬）

週末に降った雪はその後続いた好天にも関わらず、御殿の屋根の上に残り続けていた。

檜皮葺屋根の端からぽつりぽつりと滴り落ちる雪解け水を掌に受け止めた青年は、濡れた手を軽く振って水気を飛ばすと後ろを振り返った。

「何？ 進めれば」

自分を見つめる複数のまなざしに、長めの前髪からのぞく柳眉な眉をひそめる。それを見ても変わらない周囲の態度にふっと小さく息を吐くと、青年は視線を一身に集めたままゆっくりとした足取りで本殿への階段を背にした定位置に移動すると腰を落ち着けた。

「命様。我々が何をしているのかはご存知ですよね？」

「来月の祈年祭の最終調整、だろ」

立てた片膝に頬杖をつきながら、ぶっきらぼうに青年が答える。

「そうです。毎年のこととは言え、今年最初の大祭です」
「だから、知ってるってそんなこと」

4月の例祭、11月の新嘗祭、そして2月の祈年祭の三つを「三大大祭」と言う。

祈年祭は「トシゴヒノマツリ」ーー「トシ」は種をまいて刈り取るまで1年を要する稲のことを指し、「コヒ」は請うーーすなわち穀物の豊穰と国家の安泰を祈る大事な祭事で、全国の神社で行われる。

「ご存知ならば結構です」

青年の答えに従者は頷くと、集まった仲間を軽く見回した後、言葉が続けた。

「先ほど命様がおっしゃられたように祈年祭の最終調整をこれより行います」

よろしく願います、と一斉に下がる頭達を横目に青年はあくびを噛み締めた。そんな気の抜けた態度に気付いた従者が鋭い視線を突き刺して来る。それに鬱陶しさを隠さずに顔を顰めると、即座に釘をさされた。

「先に申し上げておきますが、不適切な発言は控えて下さいね」

「……お前、俺のことを何だと」

「命様以外の何者でもないと思っております」

青年に最後まで言わずに従者が真顔で言い切ると、他の者達も賛同して大きく頷く。

「あっそ」

下げる時も頷く時も綺麗に揃う従者達に青年が肩を落としながら深々とため息をついても、誰も気にも留めない。

今年も青年と従者達の果てしない闘いは続きそうだった。

不適切な表現は控えて下さい（1月中旬）（後書き）

旧サイト 2006. 1. 24UP分を加筆修正

『セリフ100』様の「ショートバージョン2」のひとつ

残念ながら雪の神宮はサイトの写真でしか見たことはありません。

福は内（2月3日）

今年最初の月が終わり「立春」の名に相応しい暖かな日差しが期待出来そうな日を翌日に控えた2月3日。

拝殿に訪れた巫女は、この時期恒例の質問を俺に投げかけた。

「命様、今年は何がいい？」

「お前、ペットボトル持ったままで」

恐らく休憩時間に抜け出してきたのだろう。巫女の片手にはお茶のペットボトルが握られていた。

「平気平気。この場所、外から見えないから」

「……節分祭はいいのか」

平然としている巫女だったが、瞬時に声の遮断とともに万が一のためにペットボトルに目くらましをかけた結果を張る。巫女に言えは「そこまでする？」と呆れられそうだが、個人的に巫女姿にペットボトルは外見的にいいものではないと思う。

そんな俺の気遣いなどお構いなしに巫女はお茶をぐびりと飲む。

「準備は終わったよ。『鳴弦の儀』も『神人の追儼舞』も私の仕事じゃないし。鬼に豆をぶつけるのは福娘さんで、いらっしゃって下さる見物人にまくのは年男さんの人達やお相撲さん。関係者だから福銭や福品も拾えないから、大人しくしてるだけ」

「楽でいいじゃないか」

後半に若干僻みが含まれていたが、節分祭をすませたら、すぐに春日へ行かなければいけない多忙の身としては羨ましい限りである。

「今年の福品の中身はなんだ？」

「秘密。でも今だけ巫女を止めたい、と思っちゃうぐらいには魅力的なものがあるよ」

「……それは困るな」

冗談に過ぎないと分かっているけど、巫女の言葉に本殿に控えている連中の気がざわりと揺らぐのが分かった。

「あーあ、福娘だったら鬼めがけて思いっきり豆をぶつけてやるのに」

その場に腰を下ろしながら呟いた巫女は、空いている右腕で何かを投げる振りをする。

「おい」

「冗談だって。そんなことしませんって」

笑って答えるが「ここでは」と声にしない言葉が後ろについている気がした。でも突っ込むような愚かな真似はしない。それは甲羅に引っ込んだスッポンの穴に指をつっこむのと同じことだ。危険と分かっていることに自ら進んで歩み寄る必要はない。

「ねえ、命様。宝くじ……はまだるっこしいや。ナンバーズとかやらない？」

「やらない」

俺の即答に巫女の頬がふくれる。そんな顔をして頬を突つつきたくなるだけだ。

「どうして。命様なら当選確実じゃない」

「真面目にやれば必ず当たるが、そうじゃないなら俺だってハズレる場合もある」

「ハズレるって命様が？　どんな場合で？」

そんなことあり得ないでしょう、と言わんばかりの視線で見上げて来る巫女に苦笑が洩れる。

「ここは八百万の神々が住まう地だ」

「うん、そうだね。で？」

問いかけながら首を傾げる巫女は本当に想像がつかないようだ。

巫女という立場にありながら、なぜ分からないのかそれが分からない。しかし「自分よりも上がいるから」なんて理由は事実でも、あまり言いたいことではない。察してくれ、である。だから沈黙をもって返事とした。

「……ま、いいや」

黙ったままの俺の考えを汲み取ったのか、そこまで興味がなかったのか――悲しいが恐らく後者だろう――巫女の素朴(?)な疑問は無回答で終わった。

＊
＊

「で、中身。何にするの？」

話がふりだしに戻った。

「毎年思うんだが上げる相手に聞くんてのは、どうかと思うぞ」
「だって上げるのなら相手が欲しがってるモノを上げたいじゃない」
「欲しいものねえ」

この巫女の態度を「手間を省いているようにしか思えない」と以前、何かの拍子にこぼしたら、そこにいた女全員に凄い勢いで怒られた。しかもそれが返田の夜須姫にまで伝わっていて、遊びに行った先でチクチクやられた。あれはかなり参った。

「恵方向いて巻き寿司食いながら考えれば妙案が浮かぶんじゃないのか」

「食べるのに夢中で無理」

「あっそ」

無言で丸ごと食べなければいけない、という決まりが邪魔するようだ。

「中身ね。最初は確か豆だったな」

「節分で余ってたんだもん」

「次がピーナッツ」

「だって好きでしょ？」

まるで連想ゲームみたいな巫女の思考にため息がこぼれる。

柿ピーは酒のつまみには持ってこいだが、チョコレートに包まれた状態で食べたいと思った事はない。メロン好きでもチョコに塗れたモノを食べたくはないだろう。いや今はチョコフォンデュなんてものがあるから、ありなのかもしれない。現にバナナチョコは屋台では定番だし……ありなのか？ 分からん。

「落花生」

「名産品なんだから一度はやっておかないと」

「苺」

「結構美味しかったよね」

「……もう小学生じゃないんだからチョコでコーティングするだけ
つては止めないか」

「沢山作るには、これが一番いいんだもん」

「だから沢山はいらないんだって言ってるだろう。俺だけにくれれ
……」

「それはダメっ」

言い終わらないうちに否定される。

「どうしてだよ。お前、自分がいくつ作ってるか分かってるのか？」

「お世話になった人に上げるモノなんだから数は関係ないの」

「それは御歳暮とか御中元」

「うるさいっ。神様のくせに細かいこと、ぐだぐだ言わないの」

勢い良く立ち上がった巫女が胸に指を突き付けてくる。斜め下か
らのきつい眼差しに続けるはずだった言葉を飲み込む。

「……リクエスト、ないのね？　じゃあ、また勝手に作るからね」

「え、おい」

「バイバイ、命様」

用は済んだとばかりに、くると背を向けて拝殿から出ていく巫女を止める術など俺にあるわけもなかった。

板間を歩く軽い足音に続き、扉の締まる音が聞こえ、拝殿に静寂が戻る。

「欲しがってるモノを上げたいって言ったのは、どこの誰だよ」

受け取って欲しい相手に眩きは届かない。

＊
＊

そして、また奇妙なバンレンタインデーが訪れる。

福は内（2月3日）（後書き）

旧サイト 2004. 2. 3 UP分を加筆修正

モデルの神宮では2月3日に「節分祭」が行われ、豆の他に地元商店街などの景品の引換券がまかれるそうです。
行ってみたい……。

生殺しだね（2月10日）

旅行帰りに土産を置きに立ち寄った巫女は、社務所で用事を済ませると御殿には顔を出さず拝殿前で手を合わせると足早に境内を後にした。そのため巫女の来訪を聞き付け、表に出てきた者達の大半はコートに身を包んだ後ろ姿を見送るぐらいしか出来なかった。

いつもならそこには目的を果たせなかった事にため息をつく彼らの姿があるのだが、今日は巫女が残っていたとある痕跡に気付くや否や、様々な挙動不振な態度を取り始めた。

「……罪作りな方ですよね」

「と言うか、皆浮かれ過ぎ」

呆れたように呟く従者の視線の先には、とても有能従者とは言えない男達の姿があった。

巫女に会えず空振りに終わった彼等は一様にがっくりと肩を落としたが、すぐに頭を切り替えて途中で放り出してきた仕事に戻ろうと踵を返した。その瞬間までは誰もが真面目な表情を浮かべていたのだが、数歩進んだ頃にはそれは跡形もなく消滅していた。

口元を手で隠しているが、丸見えの目元がだらしく緩んだ者。そわそわと落ち着きをなくし、隣りの者とぶつかる者。

小脇で小さくガッツポーズを取る者。

一見普通に見えても、明らかに纏う雰囲気がふわっふわっした者。彼らを見て「有能」と評する者は絶対にいない、そう断言できる。浮かれた空気が拝殿に漂っていた。

ちなみに巫女に関することに限り、仕事に支障が出ない程度なら最優先にしても構わない許可が下りている。最高責任者、英語で言うところのCEO――我らが主、命様だ――がそうなので誰もこの決まりに文句が言えない。言う者などいないが。

といっても全員が仕事を放棄するわけにはいかないので原則早い者順。真剣に仕事に取り組みつつ、他のこと――もちろん巫女である――にも常に気を配る。巫女訪問と空き時間が重ならない限り競争必須なので、ある意味では修行になっていないこともない。

「匂いだけで、こうなるとはね」

「多分、材料を購入しただけだと思っただけ」

間違えることなど不可能な巫女の気配と共に残されていたもの。それはこの時期、神宮の男共の関心を一心に集めているイベントに深く関わるものだった。

「これは皆、当日まで生殺しね」

数年前から家族以外に上げているフシが見られる巫女に、2月に入ると普段は押し隠している感情が洩れ出してピリピリしてくる彼等だったが、形のない置き土産から推測される購入量はひとつやふたつ作る量ではないことが明らかだった。

そうなるに淡い期待を胸に抱いてしまうのが世の常。数日先に思いを馳せ始めた彼等の足取りは、ともすればスキップを踏み出しかねない気配さえ漂う。

「明日の紀元祭、大丈夫よね？」

「特殊な行事じゃないから心配ないと思うんだけど……」

初代天皇の神武天皇が橿原の畝傍山にて即位したのを祝う祭は、巫女によって「バレンタイン」というイベントが持ち込まれて以来、例年こんな雰囲気の中で行われる。それに慣れてしまった従者達は、心ここにあらずな男達で御殿が溢れかえっていても誰も深刻に捕らえようとしていない。

「あとは巫女次第ってわけね」
「そういうことになるわね」

紀元祭と祈年祭のちょうど真ん中にある大イベント。
バレンタインまで、残り4日だった。

生殺しだね(2月10日) (後書き)

旧サイト 2006. 2. 10UP分を加筆修正

『セリフ100』様の「ショートバージョン2」のひとつ

女性陣に友チョコしか贈らなかったら、どうなるんでしょうね？

学習能力ゼロだね（2月後半）

草木の揺れる音だけが静かに響く夜半過ぎ、御殿の中は外気に反して熱気に包まれていた。

「毎年毎年、どれだけ言っても聞いて下されない」

「ひと月近く留守にする事で、どれだけ仕事がたまるか御存じのはずなのに」

「あとで大変な思いをすると分かっているが、あの方はどうして直そうとなさらないのか」

「狂いまくったスケジュールを調整する身にも、なっていたきたい」

「うちなんて命様の仕事が遅延する分、毎年十月は連日地獄なんですよ」

大祭である祈年祭が終わって一週間。

四月まで大きな祭事がないことから、この時期に各部署の代表者が集まり、今年度の反省および来年度の計画を立てる会議を毎年行っていた。

拝殿に車座になって報告や指摘を繰り返しているうちに、いつしか話題は主の事へと移り変わって行く。その内容はと言えば、当人の言動を反映したものであるため、当然のように愚痴大会へと変貌していくのが毎年に流れだった。

「とにかく。今年こそは何が何でも、こちらにいていただくようにしなければ！」

拳を握りしめながらの言葉に大多数が揃って大きく頷く中、のほほんとした声が響いた。

「無理じゃと思うぞお」

「そうねえ。だって命様の学習能力はゼロですから」

士気を鼓舞する彼等に水を差した二人組は、本殿への黒漆の扉を背にした位置に並んで座っていた。集中する視線をものともせず湯気の立ち上る湯飲みを手に笑顔を浮かべている様は、そこだけ切り取れば縁側でひなたぼっこをしているジジババかと錯角するほどである。

「というか、あの件に関しては学習する気が全くないから、ゼロ以前の問題じゃろう」

「それもそうですねえ」

その場の雰囲気を見捨て、あははおほほとんきに笑い合う姿は普段ならば注意のひとつやふたつを受けるものだ。しかし言っている人物が従者の中でも古参とあっては、周囲の者達の表情は二人と正反対の方に傾く。

「不吉な事、仰らないで下さいよ」

「貴方がたにそんな事を言われては困りますっ」

「困ると言われてものう」

「だって真実ですし」

「だから言わないでっ」

必死に高みへと押し上げた士気を足下から崩す発言に、悲鳴に似た声があちこちから上がる。

「我らでダメなら、巫女殿にお願いしましょう」

困った時の『神』頼み、ならぬ『巫女』頼み。

本末転倒とも言える法則が必殺技として通用してしまうのがこの神宮だったが、何事にも例外はつきものだった。

「巫女殿ねえ。……他の事なら通用するかもしれませんが」

「こればかりはさすがに巫女殿でも無理じゃろうなあ」

顔を見合わせて互いの言葉に頷く彼等に、固唾を飲んで見守っていた者達の表情が絶望にくしやりと歪む。

「仕方ありませんよ。だって巫女殿は代償を支払えないもの」

「代償、ですか？」

主と巫女の間には不似合いな言葉に怪訝そうな声上がる。

神宮の者にとって巫女は確かに特別な存在だが、それを理由に何かを求めたりはしない。

「そう、代償。命様が毎年あの時期、御殿を留守にされるのは神無月の守護があるせいじゃ。あれから解放されない限り、お前達の望みは叶わん」

断言した男に女が続ける。

「でも私達にその取り決めを変える事は出来ないし、代わりを務めることも出来ない。出来るわけがない」

「一番どうにかしたいと思っておるのは命様じゃ。だが、いまだに何も変わっておらん。命様に出来ないことを我らが出来ようはずがなからう」

死刑宣告にも等しい言葉に、拝殿は水を打ったように静まり返る。猛スピードでどんよりとした暗雲に覆い尽くされていく周囲に、きつかけを作った二人の方が慌て出す。

「いやあの、ほれ、えーと、何じゃ。何かあったら、きちんと戻って来て下さるのだから大丈夫じゃよ」

「それに今までずっと留守にされ続けて来ましたが、仕事は滞りなく回ってますし」

皆、伊達に経験は積んでいない。

というか他のところに比べて、無駄に経験を積んでいる。

「仮に何かあっても責任を取るのは命様じゃ。御本人もそれを分か
っていて、ああいう行動を取られるのだから放っておいて問題な
かろう」

「そうですそうです」

事情も何もかも知っている二人だからこそその発言だったが、それ
を無責任に感じて顔を顰める者も少なからずいた。

そんな真面目で融通がきかないタイプの者達にも、必ず主の言動
を達観する日が訪れる。そうでなければ、やっていけないのがここ
であるから。

学習能力ゼロだね（2月後半）（後書き）

旧サイト 2006. 2. 23 UP分を加筆修正

『セリフ100』様の「ショートバージョン2」のひとつ

唐突に「横書きの場合は数字は和数字とアラビア数字のどちらが正しいのか？」と迷いました。

調べたところ、読み物の場合は「漢数字」がベストらしいです。

まあ一作品単位で統一しており、読みやすければどちらでも可かな、なんて個人的には思いましたが。

余計不安なんだけど（2月後半）

稽古を終えて建物の外に出ると、まだ空は明るさを残していた。月初めの立春の頃はこの時間にはすっかり日が落ちていたが、祈年祭を過ぎてから少しずつ、でも確実に日は延びていた。

コートポケットから手袋を取り出し、両手にはめながら御殿の裏に回る。檜皮茅葺屋根に黒塗権現造りが立派な神殿の正面とは違い、小さな摂社や末社が並んだここは、観光シーズンでもあまり人がいない。来ても通り過ぎるだけなので、のんびりするには絶好の場所だった。

本殿の真裏まで歩くと、御殿を囲む小さな柵に腰掛ける。両膝に頬杖をつく姿勢で目の前の風に揺れる木々を眺めているうちに自然にため息がもれた。

「ちっこいのが溜め息なんて、ついてんじゃないぞ」

腰掛けている柵と御殿の間は立ち入り禁止の空間。

だから背後から声がかかるなんて本来あり得ないのだが、あり得ないことがあり得るのが振り仰いだ先にいた青年だった。

出会った当初は予期せぬ登場に毎回驚いていたが、いつからかそれを当たり前と思うようになっていた。相手は人ではないのだから、違って当然だと。

「命様、こんばんは」

「はい、こんばんは。……何だか元気がないな。どうした？」

ひょいと柵を跨ぎ、自分の正面に移動した青年は腰に両手を当てながら上半身を倒して目線を合わせて来る。自分を見つめるぬくもりの溢れた目に、口から悩みが零れ落ちた。

「覚えられなくて」

「……田舞か」

青年の言葉に力なく頷く。

四月の大祭、御田植祭で舞う舞の練習をしているのだが、これが全然進まない。教えてくれている巫女のお姉さんは「簡単だから」と言うけれど、今まで踊りといったら夏祭りの盆踊りか運動会のマイム・マイムぐらいしか経験がない。それなのに衆人の注目の中で踊れというのだから、考えるよりも先に身体が強張ってしまう。

「今からこんなに緊張してどうする、と自分でも思うんだけど」

どんどん覚えていく他の子達との差に、さらに手足の動きが鈍くなる。そのため今日も解散後、ひとり居残り練習をしていた。

「教えてやろうか？」

話しながら腕だけ習った部分をおさらいをしてみせる自分を静かに見つめていた青年だったが、滑らかとはとても言えないぎくしゃくとした動きな上に途中で何度も止まる姿に見るに見兼ねたのか、救いの手を差し伸べて来た。

「……余計不安なんだけど」

「お前、俺が舞を覚えていないとでも思っているのか」

思わず口から出た言葉に、青年の表情が引きつる。

先ほどよりも若干低くなった声に勘違いされたことに気付き、慌てて立ち上がり両手を振って否定する。

「そうじゃなくてっ。お姉さんと命様のは違うような気がするから」

「だから覚えてるっての。何度、見てると思ってるんだよ」

「だから、そうじゃなくて。命様が覚えていないなんて誰も思っていないよ。ただ流れとか空気とか、そういう目に見えないところが別物だと思うから」

同じ舞を教えてもらうのでも、巫女のお姉さんと青年では絶対に表現されるものが違う。仮に舞を覚えたとしても、他の子とズレが生じそうなのが心配だった。

「あー、そういう心配ね」

「そう！」

頷く自分を見下ろす青年は頭を掻きながら苦笑いを浮かべる。
さすがにこればかりは、青年にもどうしようもないだろう。

「まだ時間があるから頑張ってみるよ。ありがとうね、命様」
「あまり緊張する必要はないぞ。見てるのは俺なんだから」

頭をポンポンとたたいてくる手は、両親と変わりなく暖かい。
励ましの言葉をくれる相手に捧げる舞だからこそ、失敗したくな
いと思っているのを青年はきつと知らない。

余計不安なんだけど（2月後半）（後書き）

旧サイト 2006. 2. 5UP分を加筆修正

『セリフ100』様の「ショートバージョン2」のひとつ

巫女が小学校高学年の頃。

姫はご機嫌麗しくない？（3月上旬）

表からではなく旧参道を通って訪ねた本殿では、自分に声を呼びつけた青年が地元の酒を手にして待っていた。

「命様、まだ梅は咲いていないようですが？」

「俺は咲いてる、とは言っていないぞ。そろそろだからどうだ、とは言ったが」

胡座を掻いて座る青年の前に腰を下ろすと、手元にぐい呑を突きつけられる。反射的に受け取ったそれに酒を注ぎながら、青年はしれっと答えた。

普通は見頃に誘うものだが、そんな事を言って「そうか、じゃあ」と堅い蕾から一足飛びに開花させられても困るので大人しく引き下がる。

「心配しなくても『花』なら他のが見られる」

掃き出せない言葉と一緒にぐいと酒を煽る自分を意地の悪い微笑みを浮かべながら見ていた青年は、意味深なことを言うといつと表を指差した。青年の指し示す方に目をやると、正面の朱塗の楼門を

小柄な狛犬を先頭にして、ひとりの少女がぐぐり抜けるところだった。

目にした瞬間に、その少女が噂の巫女姫である事はすぐに分かった。

話には聞いていたけれど実物を見るのは初めてだったので、思わず器を手にしたまま腰を上げる。よく見えるようにと拝殿入口まで移動し、幼さを残すその姿を目で追い掛けていると、少女がぴたりと動きを止めた。

何事かと振り向く護衛の初代狛犬達を片手で制し、ゆるりと顔を巡らせた少女は拝殿をしばらく見つめた後、すっと目を細めた。

「……巫女姫はご機嫌が麗しくないのですか？」

「何だ、いきなり」

「険しい表情をしていました」

「ああ、それは緊張してるだけ」

「緊張？」

砂利音を立てながら社務所へ向かう後ろ姿は噂の大きさに比べて、まだまだ小さい。

「中旬に『春季大祭』があるだろ。そこで浦安の舞をやる事になってる。……小さい頃から舞に苦手意識があってな」

そう言いながら青年は楽しそうにくすくすと笑う。

「気のせいか睨まれたような気がしたのですが」

先ほど拝殿に向けた眼光は思いのほか鋭くて、息を飲むほどだった。

「顔見知りでもないお前の何に怒る？ 仮に怒っているとしたら俺にだな」

「命様に？ なぜです？」

「自分が大変な時に、呑気に知り合いを連れて来ているのが癪に触ったんだろう」

「それはまた……」

子供らしい八つ当たりが微笑ましかったが、次の瞬間とんでもない事に気が付いた。

「それってつまり、私に気付いていたって事ですか？」

「そうじゃないと怒らないだろうか」

青年は手酌で酒を煽りながら当たり前のように答えたが、とんでもない事だった。

「だって神気は押さえているのにっ」

他の神にテリトリーに入ったら、人でいう気配である『神気』を押さえる。境内に漂う気配に影響を与えないためと、神職につく者達の精神を乱さないためである――中には不在もしくは乱入を隠すために、なんて者もいるが。誰とは言わないが。

末端でも神に名を列ねる従者達に気付かれないのはさすがに無理でも、宮司達がこちらを察知する事はまずない。

それなのに少女は一瞬でこちらに気付いた。驚くべき感知能力である。

「それが巫女たる理由。OK？」

「……OKです」

「まあ、それだけじゃないけどな」

言いながら何かを思い出したのか、ふっと青年が笑う。

おそらくこの神宮の者達だけで共有している記憶だろう。どんなものか興味が湧いたが、今の青年が答えてくれるとは思えなかった。久々に誕生した巫女。

少女に関わる事柄はこの者達にとって、何もかもが宝物に等しいだろう。そういうことは簡単には話せないし、話したくないものだ。それが分かるから、とりあえず今日のところは引くことにした。でもチャンスがあれば、とことん掘り下げて聞こうと心に決める。

梅の代わりに見た『花』は久しぶりに自分に驚きを与えた。きつと次に訪れた時は別の驚きがあるだろう。

それがどんなものなのか。

『花』がどのように成長していくのか。

長い時の中、楽しみがひとつ増えた事が今回の訪問の最大の収穫だった。

姫はご機嫌麗しくない？（3月上旬）（後書き）

旧サイト 2006. 3. 1UP分を加筆修正

『セリフ100』様の「ショートバージョン2」のひとつ

神宮には狛犬が3世代います。

境内の外まで巫女と関われるのは「初代狛犬」のみです。

綺羅星（11月中旬）

「命様」

「んー？」

拝殿前の賽銭箱に腰掛けながら生返事をする主の見つめる先には、大勢の大人達に囲まれながら跳ねるように歩く小さな背中がひとつ。肩下まで伸ばした髪を結ぶ赤いレースのリボンが動きに合わせて、ふわりふわりと踊っている。

「どうなさいますか」

「どうしたもんかね」

朱塗りの鮮やかな楼門を潜り、その姿が見えなくなると目の前の背中が小さく揺れた。

主の纏う雰囲気から緊張感が消え、それに呼応するように周囲に普段の音が戻って来る。

「とりあえず宮司殿にご報告しておいた方がよろしいかと思いが」

「不要だろう。もう気付いている」

そう言って拝殿への階段を上る主の言葉を証明するかのように、右手から木戸を開ける音が聞こえた。続いて床の軋む音がし、すぐに噂の人物が姿を現した。

「よっ、御苦労さん」

「命様もお疲れさまでした」

ひよいと左手を軽く上げて労をねぎらう主に対し、宮司はきちんと正座をした上で私達に頭を下げた。どれだけ親しく声を交わそうが、こうした所での宮司の態度は最初の頃から変わらない。

「いかがでした？」

「小さな太陽だな」

幣殿と本殿の段差に背を預け、片膝を立てた格好の主が応える。何が、とは言わない。

言わなくても分かる。それほどにあの存在は強烈だった。

「ずいぶんと驚かれたようですね。いきなり空気が変わったので、思わず祝詞が止まりそうになりました」

「そろそろ何かが起こる気はしていたんだが……いきなり輝き出したから引きずられた。すまん」

二人が言う通り、最初は普通の七五三祝いだった。

今月初めから週末毎に幾度となく繰り返して来た中のひとつ。それが一瞬にして全く違うものへと変貌した。

主さえも目を奪われた出来事に、歴代の宮司の中でも飛び抜けて感覚が鋭い目の前の人物が気付かないわけがない。

「引き金は何だったのでしょうか？」

「俺達に触発されたと考えるのが妥当だろうな。あとはタイミング、だな」

そう言いながら、ちらりと視線を向けた主に宮司が肩をすくめる。その表情に答えがすでに用意されているのが分かる。

「命様の御推察通り、あの子は三つと七つの時に、当宮で七五三祝いを行っています」

「そして、その時は何もなかった」

血筋を重んじていた昔は巫女となる者の多くが神主の家の生まれだった。彼らは幼少の頃から徹底した教育を受けていたため、覚醒も早く力も安定していた。

「今はいつどこで目覚めるか分かりませんかね」

「まさに『天然』だな」

現在、本当の意味での「巫女」となりえる存在は少なく、宮司が言うように出現を予測する琴も困難だった。それゆえに優れた素質を秘めていても目覚めるきかけがないまま、一生を過ごす者も少なくない。

「とりあえず近いうちに彼女と話をする機会を設けます」

「そうだな、頼む」

主を見る力があるからといって、俗に言う靈感がある状態になるわけではない。それとこれとは全く別物だ。

しかし世界が変わる事に違いはなく、今までとの違い、他者との違いに戸惑うだろう。正しい知識を与え、自分自身で道を選ぶように導いてやる必要がある。

「命様。何か他人事のように仰っていますけど、命様にもその場に参加していただきますからね」

「なんで？ 説明するのは俺は必要ないだろう」

宮司の考えに異論を唱える主だったが、こういう場面で主の意見が通る事はあまりない。宮司の意見が正論であるのに対し、主の意見があまりにも気分的なものだからだ。

「論より証拠。説明するより実際に見せて体験させた方が分かりやすいではありませんか」

「教材か、俺は」

大きく溜め息をつく主を宮司はにっこりと微笑みながら見つめている。当事者にトンズラをさせるつもりはさらさらなのだろう。

「あの子を見つけたのは命様です。だからきちんと責任、取って下さいね」

「……了解」

蕾から花が開くように、蛹から蝶が羽化するように巫女として目覚めた小さな太陽。

その場に立ち会った者として、果たさなければならぬ責任が我々にはある。

時は流れー！。

少女は巫女として立派に成長した。

主を相手に一步も引かないなど、少しばかり逞し育ち過ぎてしまった感じもあるが、それは大した問題ではないだろう。

綺羅星（11月中旬）（後書き）

旧サイト 2003. 9. 12 UP分を加筆修正

『モノカキさんに30のお題』のひとつ
出会い編。

小さくても大きくても巫女が「嵐」なのは変わらず。

前回の更新からずいぶんと時間が空いてしまいました。

・・・最初は震災の影響でした。

この小説の舞台となる神宮には某神宮と対になっている凸型の「要石」があります。

それなのに何も出来なかった、と思いました。

当たり前なんですけどね。小説は小説、現実とは違います。

それでも簡単には割り切れなくて。

こんなの書いて何の意味があるんだろう、と。

でも落ち着いた頃からまた他の方々の小説を読み始めて。

時間を忘れて読みふけったり、更新を心待ちにしたり、新しい作品に出会った時に喜んだり。

・・・それでいいのかな、と思いました。

自分の小説で世界を変えたいわけでも、救えるとも思っていない。ただ読んでいる時に「面白いな」と思ってもらえたら、それで十分なんだと。

そもそも最初の話（雨乞い）で命様は言っていました。

「神社は願いを叶える場所じゃない、意気込みを報告しに来る場所

だ。少なくとも俺はそう思っている」と。

基本、彼らは見守るだけです。

良いことも悪いことも、全てをあるがままに。

今なら「ちよっとした楽しみを与えられたら、
と頑張って頑張る」と
宣言するかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8976p/>

亀甲天神

2011年11月17日19時12分発行